

清流

題字：芳野 充

平成30年3月30日

第15号

発行所 加来不動産(株)

発行者 加来 寛

北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに

静かに

清流のように

いのちを「いただきます」

さいきんでは核家族化がすすみ、孤食がふえているのだとか。とくに子どもが一人でご飯を食べる頻度がたかいと、食事のマナー(食育)が身につかないだけでなく、心身の健康保持にも影響をあたえる、というとも言われています。

我が家では妻が、なるべく家族みんなで食事ができるよう、気を配って来ています。ありがたいことです。家族で食卓をかこみながら、食育のなかでもとくに、「いただきます」「ごちそうさまでした」の大切さを、子どもたちに伝えるようにしています。なぜ、食事を口にするまえに「いただきます」というのか。食べおわってからなぜ「ごちそうさまでした」なのか。それは自分たちが生きるために、動物や植物のいのちをうばっているから。そしてそのうばった尊いいのちをいただいたているから。また食事のあとの「ごちそうさまでした」は、「ご馳走」からきていて、食べ物を加工してくれている人や、料理を作る人がいるなところを駆けまわって大変な思いをしていることに対して、感謝のきもちをあらわし、「ごちそうさまでした」というんだよ、と事あるごとに伝えるようにしています。

話は変わりますが、さいきん二冊の絵本を購入しました。『いのちをいただく』みいちゃんがお肉になる日(講談社)と『しんでくれた(佼成出版社)』です。絵本といえども、食べ物はさまざまなのちからの恩恵であることを肌で感じ、おとなである私も思わず涙をながしてしまいました。『しんでくれた』では、詩人の谷川俊太郎さんのみじかい詩のなかには、必要なことを凝縮していると感じましたので、さいごにご紹介させていただきます、わたしの胸のなかに、いのちを「いただきます」との思いを刻みたいと思います。

うし しんでくれた ぼくのために そいではんばーぐになった
ありがとう うし ほんとはね ぶたもしんでくれる
にわとりも それから いわしやさんまやさけやあさりや
いっばいしんでくれる ぼくはしんでやれない
だれもぼくをたべないから それにもしんだら おかあさんがなく
おとうさんがなく おばあちゃんも いもうとも
だからぼくはいきる うしのぶん ぶたのぶん
しんでくれたいきもののぶんぜんぶ

加来 寛

